

「道」と「歩くこと」の社会心理学(1)¹

～国内のロングトレイル，フットパス，オルレの現状と可能性～

岡本 卓也（信州大学人文学部）

要 約

本論文の目的は、観光における資源としての道の可能性を明らかにすることである。これらの目的を遂行するために、本稿では、観光に利用されているさまざまな道についての基礎的情報を纏めた。まずは、観光行動における歩くことに関する歴史の変遷を概観し、その後、近年注目されているロングトレイル、フットパス、オルレについての現状についてまとめた。これらを元に、資源としての道と歩くことの可能性について議論した。

キーワード：道，フットパス，ロングトレイル，オルレ，観光資源

1 はじめに

旅の目は低いほど良い

近年、観光スポットの見聞が主たる目的ではなく「道」を「歩く」行為そのものを目的とした旅の形が注目されている。日本国内をみても、これまでの街歩き、街道歩き、山歩きなどに加えて、ロングトレイル（アメリカ）、フットパス（イギリス）、オルレ（韓国）などの新しい歩く文化が海外から紹介され、各地に歩くコースが広がってきた（原，2015）。また、本来、信仰心に基づき歩く巡礼においても、近年では信仰心に基づかない徒歩巡礼者の増加も指摘されている（星野・山中・岡本，2012；藤原，2001）。

本研究プロジェクトの最終的な目的は、歩くことに伴う心理的変遷や心理的機能を明らかにすることと、それを踏まえ、観光における資源としての道の可能性を明らかにする事である。研究の端緒として、本稿では、観光に利用されているさまざまな道についての基礎的情報を纏める。まずは、観光行動における歩くことに関する歴史の変遷を概観し、その後、近年注目されているロングトレイル、フットパス、オルレについての現状について述べていく。

1.1 観光行動における歩くこと

古来、旅には歩く以外の選択肢がなく、貴族など特別な身分のものを除けば、歩くことが

¹ 本研究の一部は科学研究費補助金基盤研究(C)（代表者：岡本卓也，課題番号：26380841）および科学研究費補助金挑戦的研究（萌芽）（代表者：岡本卓也，課題番号：18K18691）の助成によって行われました。記して感謝の意を表します。

当然であった。Urry (2002) によれば、19世紀末から20世紀にかけて交通網が発達し、高速移動が可能になることで旅・観光は大衆化され、観光スポットを巡る人が増加した。いわば、観光は近代の産物といえる。多くの人が交通機関を利用して短時間で移動することが可能となり、観光が大衆化されていくのだが、その結果、逆説的ではあるが、「歩く」ことに価値が見出されることになる。つまり、立場や貧しさから強いられて歩くのではなく、早くて便利な移動手段があるからこそ、あえて歩くことを選択した旅に価値が見出されてきた。それでは、現代の日本において、観光行動における歩くことはどのように考えられてきたのだろうか、日本人の海外旅行の動向から考えてみたい。

冒頭の「旅の目は低いほど良い」という言葉は、地球の歩き方シリーズ（ダイヤモンド社）の創刊者の一人である安松清氏が、若者の向けの海外旅行説明会でよく用いた言葉である（山口・山口，2009）。安松氏は「歩く旅」の魅力を伝えようと、次のように続けている。

飛行機より、鉄道がいい。鉄道もいいが、バスもいい。バスもいいが、そりゃ歩くのが一番いい。たとえばローマ駅からコロッセオまで行くと、バスに乗るよりも歩いた方が、いろんなものにぶつかります。

地球の歩き方シリーズの原点には、バックパッカーの始祖とも言われるフロンマーによる節約旅行（budget travel）のガイドブック *European 5 dollars a day* (Frommer, 1957) がある。このガイドブックは、単にお金を使わない旅行を勧めているわけではなく、「旅先の日常生活に溶け込む」ための工夫を中心に情報を提供している。山口（2010）によれば、ここに、長期・低予算・周遊の三大特徴を持つ「歩く」旅の源流を見ることが出来る。山口・山口（2009）や山口（2010）は、出版メディアから日本の海外旅行史を纏めている。これらを元に、1950年代以降の（歩くことを軸に見た）観光旅行史を概観してみると、日本における海外旅行史は3つに区分されるだろう。

1960～70年代、小田実の「何でもみてやろう（小田，1961）」に代表されるような、興味本位に観光を楽しむ「歩く」旅のかたちが登場する。また、先にあげた *European 5 dollars a day* (Frommer, 1957) が勧めるような、節約することで長い期間世界中を「歩き回る」旅のかたち（いわゆるバックパッカーの旅）が広がってきた時代と言えるだろう。特に世界各地の日常的な文脈に触れることが促された点も特徴的であろう。

1980年代から90年代初頭には、沢木耕太郎の「深夜特急（沢木，1986a, 1986b, 1992）」の出版・ブームにより、それをなぞるような旅のかたちが流行する。ここでは旅先を見て回りながらも、「歩く」中で見聞きするものに対してリアクションする自分、すなわち「私さがし」に焦点が当てられることになる。その際のバイブルが「地球の歩き方」シリーズであった。

1990年代半ば以降は、小林紀晴の「Asian Japanese アジアン・ジャパニーズ（小林，1995, 1996）」に代表されるような、異文化に出逢うことで、自分と日本という日常の関係を再認識しようという「私の中の日本人さがし」の旅のかたちが特徴的である。この時代の旅する若者はアジアの安宿に留まり「沈没」する旅人が多かった。また、「カタログ型ガイドブック²」の興隆や、ホテルと航空券がセットになった、いわゆる「スケルトン・ツアー³」の一

般化に伴い、お手軽な「買い・食い」旅を指向し、アジアの都市やリゾート滞在型の旅を選択するようになった。つまり「歩かない」旅が増えてきた。

2000年代に入ってから、スケルトン・ツアーはますます増え、この傾向は強くなっていく。アジア都市とビーチリゾートへの敷居は低くなった一方で、その他の旅行方面へのハードルはかえって以前よりも高くなった。リゾートホテルや安宿に留まり「沈没」し、「買い・食い」するだけでは、どんな観光地に行こうと大差はないだろう。海外旅行が、「グルメ・ショッピング、ときどき街歩き」の数日間の「歩かない」旅行となった結果、海外への魅力が失われていき、2015年まで若者の海外旅行者数は減少の一途をたどる（図1）。なお、総務省の人口推計によれば、20代の人口は、1995年を100%とすると、2015年で66.3%と減少している。それに対して、20代の出国日本人数は、1995年を100%とすると、2015年で59.8%であり、人口の減少割合よりも、出国者数の減少の程度が大きいことが分かる。

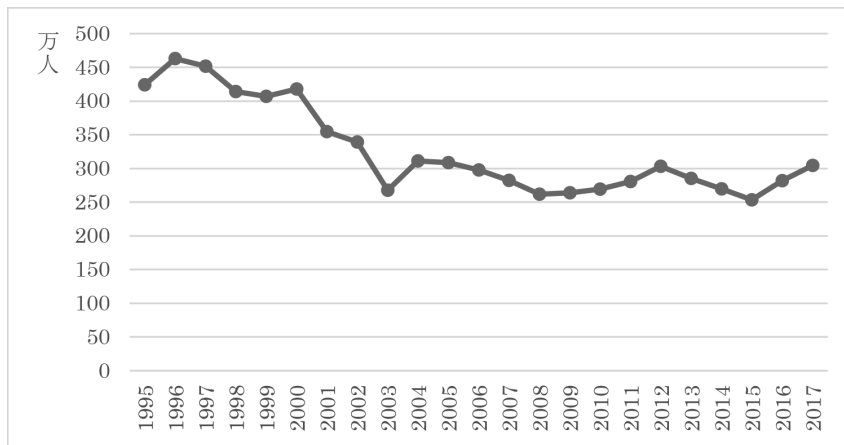


図1 20代の出国日本人数（法務省出入国管理統計（2018）より作成）

図1からは、2016-2017年の20代の出国日本人数が増加していることも読み取れる。山口（2010）では、2009年までのデータで議論されており、増加の現象については言及されていない。これが一時的な増加なのか、これから増加する傾向にあるのかは现阶段では定かではなく、今後の検討が必要だろう。

山口・山口（2009）や山口（2010）の議論を纏めれば、1950年代以降の日本の海外旅行史からは、歩いて旅をすることは、旅先（異文化）の日常生活を理解でき、自分を見つけることに繋がり、日本の再認識を促すことに繋がってきたことが分かる。しかし、2000年代以降、「歩かない」旅の増加に伴い、海外旅行の魅力は減少し、そのことが海外旅行者数減少の一因になっているのではないかと論じている。歩くことによって得られていたそれらの機能が失われることが、旅の価値を下げたと言えるかも知れない。

² お店やレストラン情報など消費情報を中心に掲載されたガイドブック。名所旧跡などの情報（特に文字による情報）が、従来型のガイドブックに比べると少ないことが特徴。

³ 航空券とホテル（とその送迎）だけのツアー。添乗員が付いたフルサービスのバックツアーに対して、その骨組み（skeleton）だけであることから、こう呼ばれる。

上述の議論は、海外旅行特に若者の海外旅行を中心にした議論ではあるが、そこで述べられていた内容は、国内の旅行でも類似しており、大型バスによるバックツアーの増加や、自家用車で目的地に向い、カタログ型ガイドブックを片手に観光スポットを楽しむスタイルが一般化することによって、「道」や「歩くこと」はないがしろにされてきた。

1.2 観光資源としての「道」

「道」そのものや「歩くこと」が、見過ごされてきたことは、日本交通公社が紹介する観光資源台帳（日本交通公社，2018）にも現れている。日本交通公社では、「感動の源泉」となり得るもの，“人々を誘引する源泉”となり得るもののうち、観光の対象と認識されているものを「観光資源」と呼び、全国津々浦々に存在する観光資源を丁寧に調べ上げ、それらを「観光資源台帳」としてとりまとめしている（傍点は著者による）。表1にあるように、観光資源について網羅的に整理されているものの、その中に「道」という資源は存在していない。また、室谷（1998）が国内観光の魅力度評定の基準として用いた観光資源を見ても「道」は存在しておらず、その価値は看過されているのが現状である。観光資源をあくまで「点」として、つまり点在しているものとして位置づけており、「道」の欠落は「線」としての観光資源を射程に入れてこなかったと言える。

表1 日本交通公社の提案する観光資源台帳（日本交通公社，2018）

1. 山岳	2万5千分の1の地形図に山岳として名称が記載されているもので、観光的に魅力のあるもの。山岳の範囲は、山頂、山腹、山麓・すそ野を含めた広い範囲とする。
2. 高原・湿原・原野	2万5千分の1の地形図に、名称が記載されている高原、原野またはこれに類するもの、沼沢以外の湿原で、観光的に魅力のあるもの。
3. 湖沼	2万5千分の1の地形図に単独の湖沼として名称が記載されているもの、またはそれに類するもので、観光的に魅力のあるもの。
4. 河川・峡谷	河川風景（河川＋周辺）および一般的に〇〇峡、〇〇峡谷、〇〇谷と呼ばれるもので、観光的に魅力のあるもの。
5. 滝	2万5千分の1の地形図に滝または諸瀑として名称が記載されているもので、観光的に魅力のあるもの。
6. 海岸・岬	砂浜、砂丘、砂州、岩礁、断崖などによって構成される海岸風景（背後地、松原も含める）、および容易に見ることができる海中景観で観光的に魅力のあるもの。
7. 岩石・洞窟	岩柱、洞窟、洞穴、岩門、鍾乳洞、溶岩流、溶岩原、賽の河原、断崖、岸壁、岩礁、海蝕崖、海蝕洞などの地質及び地形上の興味対象で、観光的に魅力のあるもの。
8. 動物	日本特有の動物、日本の自然環境における特有の動物、日本著名の動物及びその生息地で、観光的に魅力のあるもの。
9. 植物	名木、巨樹、老樹、並木、森林、植物帯、植物群落、自生地、限界地などで、観光的に魅力のあるもの。
10. 自然現象	火山現象（噴火・泥火山現象、地獄現象など）、潮流現象（渦流、潮流など）、気象現象（樹氷、霧氷、流水など）などの自然現象で学術的に価値の高いもの、観光的に魅力のあるもの。
11. 史跡	生活、政治、祭、信仰、教育学芸、社会事業、産業土木、外国人などに関する遺跡（城跡は除く）で、観光的に魅力のあるもの。
12. 神社・寺院・教会	由緒ある建築的に優れた社寺、文化財を所蔵または付帯する社寺、境内（庭園を含む）が優れている社寺などで、観光的に魅力のあるもの。
13. 城跡・城郭・宮殿	古代から近世に至る軍事や行政等の目的で建造された城跡・城郭（庭園を含む）・宮殿で、観光的魅力のあるもの。

14. 集落・街	農山漁村や歴史的街並み、繁華街、商店街などにより、その土地の自然や歴史、文化を表す特徴的な集落・街区を構成している地区で、観光的に魅力のあるもの。
15. 郷土景観	生業や風習、その土地の産業、人の織りなす風景など、その土地の自然環境や歴史、文化を表す特徴的な景観を構成している地区で、観光的に魅力のあるもの。
16. 庭園・公園	鑑賞や散策などのために作庭および造成された庭園・公園で、観光的に魅力のあるもの。
17. 建造物	建物、橋、塔などの建築物や構築物（社寺、城郭に含まれるものを除く）で観光的に魅力のあるもの。
18. 年中行事（祭り・伝統行事）	社寺や市町村あるいは各種団体が開催日を決め年中行事として行われているもののうち、観光的に魅力のあるもの。
19. 動植物園・水族館	国内外の動植物を収集、飼育、展示している施設で、観光的に魅力のあるもの。
20. 博物館・美術館	国内外の歴史的資料・科学的資料や美術作品（絵画、彫刻、工芸品等）を収集、保存、展示している施設、および歴史的事象などの記録、保存等のために作られた園地で、観光的に魅力のあるもの。
21. テーマ公園・テーマ施設	特徴的な概念（テーマ）を表現し、それを体験するために作られた園地や施設で、観光的に魅力のあるもの。
22. 温泉	温泉浴を体験できる施設またはその場での温浴行為で、観光的に魅力のあるもの。
23. 食	日本または地域の自然や歴史、文化を表す特徴的な食事や食文化、食事環境で、観光的に魅力のあるもの。
24. 芸能・興行・イベント	日本または地域の歴史、文化を表す興行や芸能、イベントで、観光的に魅力のあるもの。

資源研究者のジンマーマンは、資源について「資源は存在するものではなくて、生まれるものであり、静的なものではなく、人間の欲望と人間の行動に応じて拡大したり収縮したりするものである」としたうえで、「道」には人間によって資源とみなされる機能として次の3つを挙げている（Zimmermann & Hunker, 1964）。第一は、移動・アクセスの手段としての機能、すなわち交通・移動機能である。第二は、公共空間としての道が有する機能で、立ち話をしたり、子供の遊び場となったりするなど、地域住民のコミュニケーションの場としての役割を果たす公共空間機能である。第三は、道を含めた空間が形成する景観が人々に地域らしさを感じさせたり、景観を楽しんだりするような景観形成機能である。

道の機能として、第1の機能が中心となり、第2第3の機能については、低下あるいは過小評価されていると言えるだろう。

1.3 「道」を「歩くこと」の再興

一方で、先述したように、近年「歩く」行為そのものは注目されている。笹川スポーツ財団の調査によれば、年1回以上の散歩・ウォーキングの実施率が、1996年には22.3%（推計2,141万人）であったが、最新の2016年調査では44.2%（推計4,592万人）にまで増加している（笹川スポーツ財団, 2018）。図2は笹川スポーツ財団が公開する、「スポーツライフに関する調査報告書（1996～2016）」のデータを元に作成したものである。

このように、歩く人口が増えている中、特に、ロングトレイル（アメリカ）、フットパス（イギリス）、オルレ（韓国）などの新しい歩く文化が海外から紹介され、各地に歩くコースが広がっている（原, 2015）。例えば、ロングトレイルに関しては、日経トレンドイによる2013年のヒット予測ランキングの1位として日本流ロングトレイルが選ばれている（日経TRENDY, 2012）。

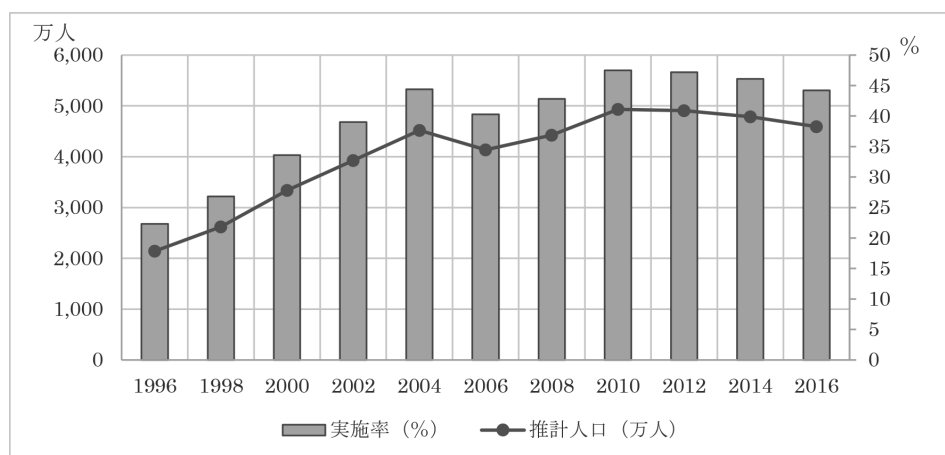


図2 年1回以上の「散歩・ウォーキング」実施率と推計人口の推移（1996～2016年）

また、2010年以降、あるテーマの道を歩くことを主題にした映画が相次いで作成され、日本でも公開されている。例えば、スペインの聖地サンティアゴ・デ・コンポステーラまでの巡礼を舞台にしたエミリオ・エステヴェス監督の「The way（邦題：星の旅人たち（2012年公開）」や、アメリカの自然歩道パシフィック・クレスト・トレイル（PCT）を3ヶ月かけて歩いた女性の実話を描いたジャン＝マルク・ヴァレ監督の「Wild（邦題：わたしに会うまでの1600キロ（2015年公開）」、アメリカの自然歩道アパラチアン・トレイルを歩く高齢男性を描いたロバート・レッドフォード監督の「A walk in the woods（邦題：ロング・トレイル！（2016年公開）」、チベットの小さな村から五体投地をしながら1年かけて聖地ラサを目指すチャン・ヤン監督の「Paths of the soul（邦題：ラサへの歩き方（2016年公開）」などである（公開年はいずれも日本での公開年）。

日本では未公開の作品も挙げれば、2013年に公開されたアメリカのジョン・ミューア・トレイルを歩く芸術家一行の旅のドキュメンタリー映画である、フィッツパティック監督の「Mile mile & a half（2013年）」もある。また、ドキュメンタリー映画としては、2012年にPCTを歩いた日本人、齊藤正史の「ロングトレイルハイキング～アメリカ縦断PCT 4260kmの旅」も2014年にDVDになっている。さらに厳密には「道」とは言えないかも知れないが、ジョン・カラン監督の、オーストラリアの砂漠3,000kmを横断した女性の実話を元にした「Tracks（邦題：奇跡の2000マイル）」も2013年に公開されている。もちろん、道や旅を人生にたとえ映画のモチーフにしたものや、いわゆるロードムービーなどは枚挙に遑がないが、あるテーマに沿って作られた「道」を「歩くこと」そのものを中心に据え置いた作品は、近年に特徴的と言えるだろう。

このような流れは、映画だけでなくアニメや漫画、さらには舞台にも見られる。2013年から2017年には、アニメキャラクターと実写を交えつつ四国遍路を紹介する「おへんろ。」が放映された。また、おなじく四国八十八ヶ所の歩き遍路をテーマにした、しまたけひとの「アルキヘンロズカン（しま、2012）」や、同作者による、みちのく潮風トレイル（後述）を舞台にした「みちのくにみちつくる（しま、2016）」などの漫画作品にも、遍路道やロング

トレイルを歩くことが取り上げられている。また、2016年にはジェームス三木の脚本による舞台「お遍路さんどうぞ」も公開されている⁴。

さらに、通常の道以外にも、鉄道の廃線跡、河川水路の暗渠、廃墟廃屋、戦災の痕跡など、これまで片隅に放置されていた対象も歩くコースとして注目されてきている（原，2015）。たとえば、鉄道の廃線跡などは、地域振興のために行政が積極的に整備を進めている例も多い（秋田，2015など）。

以上のことを踏まえ、本稿では、ロングトレイル、フットパス、オルレの特徴について、先行研究の比較的豊富な巡礼に関する研究を参考に纏めていく。

なお、移動の経路を表す英語の言葉には、トレイル (trail)、パス (path) のほかにも street, road, route, trace, track, way などがある。野島 (1981) によれば、street は舗装された道、road は ride を語源として馬などの乗り物に乗って通う道を意味し、route は、切り開く、掘り起こされた空間、way は「行く」という意味を語源としている。また、trail はもともと、歩道や動物の足跡、荷馬車用の道路を意味している。Moor (2018) は、オクスフォード英語辞典による trail の定義「整備されていないパス」を引用しつつ、「パスは威厳があつて堂々とし、人の手が入っていることを感じさせるが、トレイルは無計画で洗練されておらず、人の思うままにならない。パスは前方に、トレイルは後方に伸びている。パスは、都市の建造物に似て、より文明度の高いものと考えられている。それは前方の空間へ伸びる線であり、知性によって考案され、手という高貴な器官によってつくられる。反対に、トレイルは逆さ向きに、雑然と、汚い足が通ることによってつくられていく」とも述べている。

オルレ (olle) は、韓国の済州島の方言で「通りから家に通じる狭い路地」という意味である。

2 聖地巡礼の道

2.1 聖地巡礼

日本国内で最も有名な聖地巡礼は、弘法大師ゆかりの八十八ヶ所のお寺を結ぶ1200キロにも及ぶ四国遍路だろう（写真1）。その他にも、山岳信仰の行場として成立していた熊野三山を目指す熊野詣、「伊勢に行きたい 伊勢路が見たい せめて一生に一度でも」と歌われ、おかげ参りとも呼ばれるお伊勢参りなど、様々な巡礼（路）がある。

世界的に見れば、聖ヤコブをまつるために建設された聖堂、サンティアゴ・デ・コンポステーラ大聖堂を目指すサンチャゴ巡礼や、イスラムの聖地メッカを目指すメッカ巡礼、チベットの山岳信仰から生まれたカイラス巡礼など、あらゆる宗教にそれぞれの聖地巡礼があるとも言えよう。

⁴ 四国遍路が様々なメディアに頻出するのは、2014年が、弘法大師が四国霊場を開創したと伝えられている弘仁6年（815年）から1200年の節目にあたることも関係している。



写真1-1 次の札所までの道案内



写真1-2 お接待のいよかん



写真1-3 最初の「遍路ころがし」を登るお遍路さん

写真1 四国遍路の様子 (いずれも著者撮影)

近年では、聖地巡礼が多様な文脈で用いられるようになっており、アニメ聖地巡礼などのように宗教的文脈が薄く、メディアによって作られた聖地巡礼など、多様化している。山中(2012)は、このような多様化する聖地や聖地巡礼を、宗教的聖地なのか非宗教的なのかという軸と、信仰・慰霊・顕彰なのかツーリズム・文化財なのかという2軸によって整理を行っている。そこでも、取り上げられているように、アニメ聖地巡礼やダークツーリズムなど、巡礼がツーリズムの一つの形態としても考えられている面もある。それらについても、論考する必要はあるが、ここでは、国内で最も巡礼者の多い四国遍路を取り上げ、道空間の

機能について纏めておこう。

2.2 道空間の機能

遍路道を社会学の立場から研究した長田・坂田・関（2003）は、道空間の機能として、暫定的ではあるが4つに分類している（表2）。その上で、遍路道について①歩き道空間（移動機能）であり、②遍路宿空間（エネルギー処理機能）であり、③接待・コミュニティ空間（コミュニケーション機能）であり、④大師信仰空間（意味生成機能）という多面性を持ち合わせることが、多くの人が遍路道に惹かれるのではないかと述べている。先に述べた Zimmermann & Hunker（1964）の、交通移動機能は①②に、公共空間機能は③に、景観形成機能④にそれぞれ対応しているとも考えられる。

表2 道の内部機能
（長田・坂田・関（2003）p.70を元に、AGIL 情報を加えた）

	機能	AGIL 機能
1. エネルギー処理機能	移動に伴う物質の補給と排出を処理する場の機能	Adaptation
2. 移動機能	ヒト・モノ・カネ情報が移動・伝達する場の提供	Goal attainment
3. コミュニケーション機能	移動に伴う人間同士の社会的相互作用が生成する場の提供	Integration
4. 意味生成機能	移動に伴う象徴的・心理的意味作用を促す場の提供	Latent pattern maintenance

また、長田他（2003）は、難点があることを認めた上で、これら4つの機能について T. パーソンズによる AGIL 機能図式による理解を試みている。AGIL とは、適応（Adaptation）、目標達成（Goal attainment）、統合（Integration）、潜在的な型の維持と緊張処理（Latent pattern maintenance and tension）の4つである。また、その機能がシステムと外部の環境との間に関わるか、それともシステム内部の諸要素間やシステムとの関係に関わるのか、また、目的それ自体が充足的なのか、それとも手段的なのか、という2軸によって整理される（図3）。本稿では、これを参考に、ロングトレイル、フットパス、オルレについて纏めていく。なお、長田他（2003）は、道空間への関係者の関与という観点から、「1. 計画開発」「2. 利用活動」「3. 維持管理」「4. 消滅・閉鎖」という4段階の主要局面（段階）をあげ、4つの機能と主要局面をクロスさせ、遍路道でのフィールドリサーチから、現代遍路道の概況を整理も行っているが、本研究では、図3の4つの機能を枠組みとして整理を試みる。

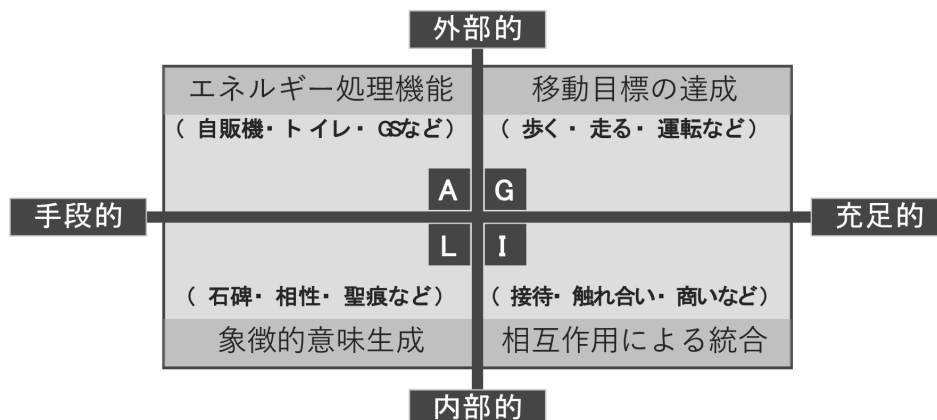


図3 道空間の機能（長田・坂田・関（2003）現代の四国遍路 p.72を参考に作成）

3 ロングトレイル

3.1 ロングトレイルとは

日本ロングトレイル協会（2018）によれば、ロングトレイルとは、「『歩く旅』を楽しむために造られた道のこと、登頂を目的とする登山とは異なり、登山道やハイキング道、自然散策路、里山のあぜ道、ときには車道などを歩きながら、その地域の自然や歴史、文化に触れることができる道」のことである。また、「歩いて旅する時代へ・・・健康と自然志向のライフスタイルへの関心が高まるなかで、『自然、環境、旅、健康、学び』などのニーズは、『歩く』から、さらに『歩く旅』へと進化しています。」とも紹介されている（日本ロングトレイル協会、2018）。

ロングトレイル発祥の地といわれるアメリカでは、3大ロングトレイルが有名である。3つとは、東部のジョージア州からメイン州にかけての14州にまたがる約3,500kmのアパラチアン・トレイル（Appalachian trail）や、西海岸の3つの州、カリフォルニア、オレゴン、ワシントンとメキシコからカナダまでつなげるパシフィック・クレスト・トレイル（Pacific Crest Trail）、ロッキー山脈を南北に走り、アメリカ大陸を二つに割くように走るコンチネンタル・デイバインド・トレイル（Continental Divide Trail）である。その他にも、アメリカ西部のヨセミテ国立公園から米国最高峰のホイットニー山（4,418m）まで、シエラネバダ山脈を南北に縦断するように整備された全長340kmのジョン・ミューア・トレイル（John Muir Trail）も有名である。このトレイルは自然保護の父とも呼ばれるジョン・ミューアの功績を讃えて作られた。

また、アメリカ以外の国では、ツール・ド・モンブラン（フランス）、アンナプルナ・サーキット（ネパール）、ミルフォード・トラック（ニュージーランド）、インカ・トレイル（ペルー）なども、ロングトレイルとしてよく知られている。

3.2 日本におけるロングトレイルの取り組み

日本におけるロングトレイルの始まりは、バックパッカーでネイチャーライターに加藤則芳による「ジョン・ミューア・トレイルに行くーバックパッキング340キロ（加藤，1999）」と言われている。彼は自然保護の観点から、アメリカにあるジョン・ミューア・トレイルへ関心を持っており、その340kmの道のりを踏破した後、日本のアウトドア雑誌で、日本のロングトレイルを歩くという連載を行っていた。しかし、その当時の日本の山岳文化は、ピークハントが中心であったため、なかなか根付かなかつたと述べている（NPO 法人信越トレイルクラブ，2012）。そもそも、日本における山登りの文化はどのようなものであったのだろうか。

日本人にとって山（登り）は身近な存在であり、ピークハント代表されるような山登りは定期的にブームが繰り返されていた。日本人の山との関わりについて岡本・藤原（2015）を参考に、纏めてみよう。

山は、原始的には大自然の驚異に対する畏怖の念から、崇拝の対象となり、山岳信仰の発生へと繋がっていた。しかし、必ずしもそれらの山に登り祈るというわけではなく、遠くから拝む存在であった。中世には、山中に入って修行を行う仏教系統の山岳修験者が出現する。7世紀ごろからは信仰登山が盛んになり、江戸時代の後期になると、次第に物見遊山的な色彩が強まり精進潔斎はごく簡単に済まされるようになった（小泉，2001）。戦後、楢有恒のマナスルへの登頂（1956年）をきっかけに第一次登山ブームがおこり。1980年代には、バブル期の海外旅行に変わるレジャーとして中高年を中心とした第二次登山ブームがおき、「日本百名山」（深田，1964）が注目される。さらに近年では、登山はスポーツ化し、レジャーの1つとして定着してきた。「日本200名山」（深田クラブ，1992）を中心に登山道の整備が進み、2009年には「山ガール」という言葉も注目を集め、若い女性がレジャーの一つとして山登りに訪れるようになった。

これらを背景に、ロングトレイルはアウトドアスポーツとして彼らに受け入れられていったといえる。また、第二次登山ブームを担っていた当時の中高年が年齢を重ね、「健康」という目的が明確に出来、きつい登山からトレッキングやハイキングに移行し始めている（中村，2013）。このことも、ピークを目指さず、自然の中を中心に長距離を歩くロングトレイルが受け入れられる土壌となったといえるだろう。

ロングトレイルと類似したコンセプトの道が、2000年代までの日本に無かったわけでは無い。1970年代、環境省の前身である環境庁が「長距離自然歩道」の整備に取り組んでいた。長距離自然歩道は、「国土を縦断、横断又は循環し、多くの人々が四季を通じて手軽に楽しくかつ安全に国土の優れた風景地等を歩くことにより、沿線の豊かな自然環境や自然景観、さらには歴史や文化に触れ、国土や風土を再認識し、併せて自然保護に対する意識を高めることを目的に（環境省，2018）」整備されてきた。神田（2007）によれば、この計画が発表された当時、長距離自然歩道は、高度経済成長期における高速交通網の整備など、進行する大規模国土開発に対するアンチテーゼとして、大きな反響を呼び、マスコミ、国民の喝采を浴び、ロングトレイルによる「歩く旅」の提案は、いまも生きる現代社会への問題提起でもあった。

長距離自然歩道は、全国で9道あり（開設順に東海、九州、中国、四国、首都圏、近畿、

中部北陸、東北、北海道)、それぞれ都道府県をまたがるように整備され、計画総延長距離は約27,000kmにもなる。1975年に東海自然歩道の整備が終わり、つづいて九州自然歩道の整備を終えるなど、次々と設置されてきた。いわゆるロングトレイルといえる自然歩道の整備と言えらる。しかし、維持管理はそれぞれの県が行うという仕組みを取っており、県の財政難から管理が行き届かなくなる道が出てくることになる。景勝地付近は利用者も多く、様々な予算が付けられることから、管理がなされやすく、歩きやすい道が存続するが、景勝地間を繋ぐ道は通行者も少なく、管理が行き届かなくなり、不通区間が生まれるなど、自然遊歩道は一つの繋がった道ではなくなったものも多い。つまりロングトレイルとは言いがたい状態の道が大半であった。

3.3 ロングトレイルの現在

このような状況の中、加藤則芳氏が米国のロングトレイルとその文化、管理システム、自然保護の考え方を積極的に導入し、ロングトレイルの管理の仕組み作りがなされていく。特に信越トレイルは、最も早くからロングトレイルの構想に基づいて整備が始まり、2000年代始めには地元関係者などを中心にルート設置の検討が始まる。2004年にはNPO法人信越トレイルクラブが発足し、2010年には自然との共生の理念を唱えた信越トレイルが開通した(猪股・周・佐野・紀・呉羽, 2017)。

これらを中心に、2011年には日本ロングトレイル協議会が発足した。現在では、ロングトレイルの運営組織の組織は、自治体、観光協会、商工会議所、NPOなどさまざまであるが、地域との連携が運営組織の基本となっている。また、トレイルの「見える化」として、歩くための詳細な情報を盛り込んだマップの充実化もなされている点も特徴的である。

中村(2017)によれば、日本ロングトレイル協会に加盟しているトレイルは、2014年には10トレイルであったが、2017年には18トレイルとなった(表3)。整備中のトレイルも全国各地にあり、この先さらに増加する見通しである。さらに、多くのトレイルに専属のトレイルガイドが存在しており、初心者でも参加しやすく、また周辺の動植物や環境について学ぶことも出来る。

表3 日本ロングトレイル協会登録トレイル

北根室ランチウェイ	霧が峰・美ヶ原中央分水嶺トレイル
十勝ロングトレイル	金沢トレイル
奥津軽トレイル	高島トレイル
信越トレイル	大江山連峰トレイル
ぐんま県境稜線トレイル	山陰海岸ジオパークトレイル
浅間・八ヶ岳パノラマトレイル	広島湾岸トレイル
八ヶ岳山麓スーパートレイル	石鎚山系ロングトレイル
塩の道トレイル	国東半島峯道ロングトレイル

また、環境省は新たな10番目の長距離自然歩道として「東北太平洋岸自然歩道」の整備を進めている(写真2)。これは、「三陸復興国立公園の創設を核としたグリーン復興のビジョ



写真2-1 みちのく潮風トレイル 起点 / 終点



写真2-2 北山崎近辺の海岸沿いの道



写真2-3 漁港内を通過する



写真2-4 環境省による歩行者カウンター

写真2 みちのく潮風トレイルの様子 (いずれも著者撮影)

ン(平成24年5月)」の一つとして位置づけられており、「東北太平洋沿岸地域を歩くスピードで旅をすることにより、車での旅では見えない、自然と人里の風景や歴史、文化などの奥深さを知り、体験する機会を提供する(環境省自然環境局, 2012)」ことを目的に整備が進められている。青森県八戸市燕島から福島県相馬市松川浦まで約700kmが計画されており⁵、2019年3月に全通する予定である。また、愛称として「みちのく潮風トレイル」という名前が付けられ、この名称で公式サイトも作られている⁶。みちのく潮風トレイルのねらいとしては、先述したようなこれまでの長距離自然歩道の目的以外にも、自然の脅威を学ぶこと、防災教育や震災にまつわる遺構も含めた復興シンボルという意味も込められている。みちのく潮風トレイルを舞台にした「みちのくにみちつくる(しま, 2016)」でも「日本の新しい巡礼の道」というキャッチコピーが付けられている。

⁵ 当初は700kmと計画されていたが、2018年現在で900kmを超えている。

⁶ <http://tohoku.env.go.jp/mct/>

以上のことを踏まえ、ロングトレイルの特徴を（長田他，2003）の枠組みに合わせて整理すると図4のようになるだろう。

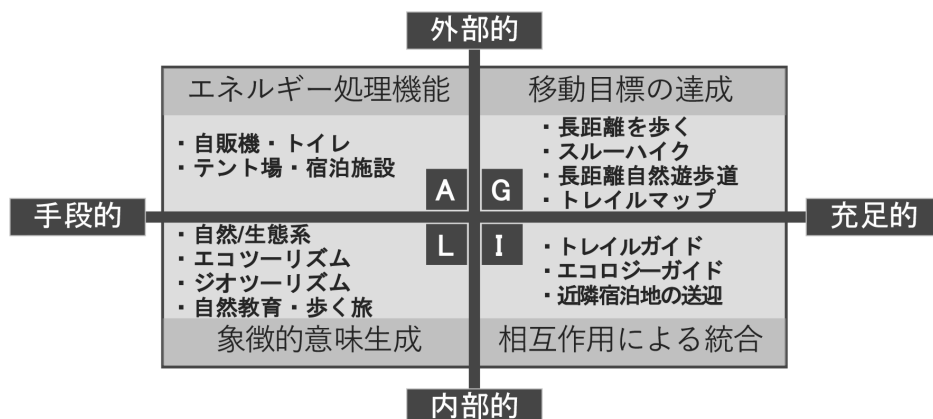


図4 ロングトレイルの特徴

4 フットパス

4.1 フットパスとは

日本フットパス協会によると、フットパスとは、「イギリスを発祥とする、森林や田園地帯、古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと（Foot）ができる小径（Path）」である（日本フットパス協会，2018）。

また、フットパスの普及を図る北海道のエコ・ネットワークでは、以下のようにフットパスを紹介している（エコ・ネットワーク，2018）。

ピーク（山頂）を目指す登山道、特定の目的（地）を指向するハイキングコース、あるいは国立公園や森林公園の中だけで完結するクローズドな遊歩道、園路とは根本的に違う。ある特定の目的を実現するための道というよりは、『“多様”な要素の環境の中を歩く道』とみるべきだろう。田園地帯（カントリーサイド）、森林、草原、川沿い、海岸線は言うに及ばず市街地、工業地帯が含まれていても一向に構わない。自分のベースでルート沿いの自然、文化、歴史、景観、農業、漁業、酪農などに直に触れ合える楽しみがある。

「何をもってフットパスというのか」を問われれば『つながり』に他ならないと私は思う。「人と人」「地域と地域」あるいは「人と地域」の「つながり」である。

フットパスが生まれた歴史的背景は、15世紀以降に始まる領主・地主による土地の囲い込み運動がある。これに対して小作農や都市住民が、土地や自然に対するアクセス権、歩く権利（right of way）を獲得する法的闘争の歴史というコモンズ論の流れの中から生まれてき

た。最も長いもので160キロ以上になり、イギリス各地には、様々なフットパスのコースが整備され、ルートマップや道標が作成されている。また、2007年には、“walkers are welcome town”という、自分たちの住む街を通るウォーカーに対して様々なサービスを提供する取り組みも行われ始め、現在では、“walkers are welcome town”を掲げる街は100を越えている(McCloy, 2016)。

さらに、高い経済効果が得られるとして、フットパスが地域活性化に役立つことが確認されている(Fewster, 2004)。イギリスのウォーキング組織「ramblers」によると、ウォーキングは農山村部で年間5.5億ポンド(約1045億円)の経済効果を生み、人気の「The West Highland Way」は年間75,000人の利用があった(寺村, 2015)。

4.2 日本におけるフットパスの取り組み

日本におけるフットパスへの取り組みは1990年代後半頃から、東京都町田市・北海道・山梨県甲府市・山形県長井市で同時期に始まった。これらは、イギリスにおけるフットパスのように「歩く権利」を目指した運動ではないがフットパスの始まりは、これらの地域での取り組みと考えられている。この点について、1992年に町田市でフットパス活動を開始し、日本フットパス協会理事でもある神谷(2014)は次のように述べている。

名所旧跡などではない、いつも車で通り過ぎているような周辺のみちを歩いてみると、幼少期に見たような原風景が意外に多く残っていることに気づき、改めてその美しさに胸を打たれたのである。このような自分の地域を歩くということは当時とても新鮮で多くの人を惹きつけた。そしてこの活動はイギリスのフットパスに似ているということでフットパスと呼ばれるようになった。日本のフットパスはイギリスのような法的な権利ではなく、歴史的な時期や社会的背景も異なるが、それはちょうどイギリスで産業革命の後に人間性の回復を求めてフットパス運動が起きたように、日本でもバブル経済が崩壊した1990年代後半に現れた社会現象で、あったように思う(神谷, 2014)。

北海道でフットパスが広まった契機は、札幌市で開催された北海道新聞主催の野生生物基金フォーラムである(泉・廣川, 2018)。このフォーラムは、イングランドのフットパスを教材とし、都市住民等のレクリエーション需要を含めた「歩くこと」への期待を、地域活性化に結びつけることが念頭に置かれていた。2012年には「フットパスネットワーク北海道」が設立され、レクリエーションの一つとして普及した。

町田市でのフットパス普及について、坂本・廣川(2014)によれば、町田市がベッドタウンとして発展することで里山が破壊されることを危惧したNPO法人「みどりのゆび」の活動の中から始まっている。自然の大切さを多くの人に理解して貰うためには、歩くことで、その地域の歴史や文化自然や風景といった地域の魅力に触れてもらうことが最も効果的と考え、自然豊かな「みどりの道」が整備される。この時に整備されたみどりの道が、その後フットパスとなる。この取り組みは、里山を活かしたまちづくりを目指していた町田市との協働として展開されたことも特徴的であろう。

町田での多摩丘陵フットパスや、北海道での取り組みの成功を受け、2000年前後から日本

各地でフットパス事業が取り組まれ始めることになる。フットパス事業は、村落共同体の通行や生活の場として用いられてきた里道⁷や作業道・遊歩道等を散策路として再整備する形で展開しており、地域活性化に向けての新たな資源として注目を集める。町田市での事例と同様に、その他の地域でも、公的機関が主体となるのではなく、整備・補修にあたっては地元住民を主体に都市住民との協働で実施する方法が定着しつつある（小川，2007）。

2018年現在、日本フットパス協会に登録され、紹介されている国内フットパスは表4の通りである。ここで紹介されている以外にも、例えば、札幌を拠点とするエコ・ネットワーク⁸では、北海道内のフットパスとして53のコースが紹介されているなど、日本全国では数えきれないほどの数になるだろう（写真3）。



写真3-1 美里フットパスのマップ



写真3-2 地域の間伐材を利用した案内板



写真3-3 フットパスの道中に景色を楽しむために置かれたベンチ

写真3 フットパスの様子（いずれも著者撮影）

⁷ 里道（りどう）とは、主に近代的所有権制度が確立された明治時代以前、地元住民によって作られて、コミュニティの利便に供された道で、特定個人による排他的な利用や管理は行われず、コミュニティにおいて自由に利用し、共同で管理された道（泉，2010）である。

⁸ <https://city.hokkai.or.jp/~eco/ecofootpath/hokkaidoFPlist.html>

表4 国内フットパスの例（日本フットパス協会，2018）

北海道黒松内町
エコ・ネットワーク（北海道）
山形県長井市
最上川リバーツーリズムネットワーク（山形県）
茨城県行方市
みどりのゆび（東京都町田市）
愛岐トンネル群保存再生委員会（愛知県）
鹿野往来交流館「童里夢」（鳥取県鹿野町）
里山ねっと・あやべ（京都府）
やまなしフットパスリンク
美里フットパス協会

4.3 フットパスとまちづくり

フットパスはまちづくり，地域振興，観光振興への貢献という観点から語られることが多い。神谷（2014）もフットパスに内在するまちづくりの力として5つの利点を挙げている。第1の要素はまちづくり資源の発見である。フットパスをつくるために地域のことを知る必要があり，その結果，自らの地域の魅力に気付くというわけである⁹。第2の要素はファンづくりである。フットパスを歩く楽しみを見つけた人たちは，遠くからであろうと，何度でもその地域に足を運ぶようになる。第3の要素は共同体の再生である。フットパスによって外部住民のイベントに地元民が協力したり，反対に外部住民が地元の活動に参加したりで，一緒に作業を行う機会が増える。第4の要素はプラットフォームの形成である。フットパスを作る過程で様々な立場の人が交流することになり，以後合意形成のもとにまちづくりが進むようになる。第5の要素は経済効果である。ここには人的資源も含まれる。

また，廣川（2014）は，フットパスによる地域振興策の特徴として，以下の7点を挙げている。

- ① 日常生活に密着したありのままの生活空間を見せる
- ② 新たな観光スポットを一から作り出すわけではないので，コストがかかず，導入の際のハードルは極めて低い。
- ③ 郷土料理や地元産品の提供による，地域住民による「おもてなし」や交流
- ④ 四季折々の風景や人びととの交流が楽しく，再訪性を期待できる。
- ⑤ 歩くため，滞在時間が長く，また現地での消費も促される。また地域内での飲食を誘発する効果もある。
- ⑥ フットパス客は歩くために来るので，期待値が低く，地域での「おもてなし」や思いがけない出会いは付加価値となりやすく，高い満足度が得られる。
- ⑦ 地域社会のファンになってくれる。地域住民を巻き込みつつ，交流をすることで，その地域の郷土史や，食材などの生活に関する地域文化を体験することができる。

⁹ この心理過程については，写真を使った面接調査に関する研究（岡本・石盛・加藤，2010）で指摘されている過程と同様であろう。

4.4 フットパスと生活景

地域振興やまちづくりに役立つ点が強調されるフットパスではあるが、フットパスによる地域環境の改善効果、伝統的文化の継承などの効果は、副次的効果として認識するべきであって、これらを目的化しそれを達成するためにフットパスを導入するというのは、「目的-手段」関係を取り違えているという指摘もなされている（廣川，2014）。

また、平野・泉（2012）も指摘するように、フットパス事業において目指されているのは、マストツーリズムの受け皿としての巨大観光施設の整備や、原生自然環境を生かしたエコツアーの発展とは異なるスタイルの地域活性化である。すなわち、外部者（訪問者）が「歩き」、居住者との「交流」をはかることによって、それぞれの価値観を変化させ、地域発展に向けての機運を内外から高めることが目的と考えられている。このような効果は、加藤・林・前村・岡本・藤原（2015）の指摘する移住者による地域資源の評価のメカニズムからも説明が可能であろう。

また、フットパスにおける資源としての景観のとらえ方は、生活景の考え方が参考になるだろう。生活景とは生活の営みが色濃くにじみ出た景観であり、権力者、専門家、知識人ではなく、無名の生活者、職人や工匠たちの社会的な営為によって醸成された自生的な居住環境の可視的表象である（後藤，2007）。1970年以降、経済成長の結果として引き起こされた環境問題に対し、景観政策における「風致」や「美観」といった景観整備の主たる目標は緑化や美化にあり、都市の景観は画一化されその個性が喪失されてしまう可能性があった。そこで、80年代に「まちづくり」の観点から景観を捉える流れが生まれ、各都市の固有性としての生活景の重要性が意識されるようになった（岡本，2013）。「美観」や「風致」あるいは山岳信仰を背景とする「自然景」が非日常的な特別な景観なのに対して、生活景は日常の暮らしを反映し、地域の風土や伝統に依拠した生活によって生み出された地域の日常の景観といえる。フットパス事業で目指されている景観資源のとらえ方は、生活景の考え方と同根のものと言えるだろう。

以上のことを踏まえ、フットパスの特徴を長田他（2003）の枠組みに合わせて整理すると図5のようになるだろう。

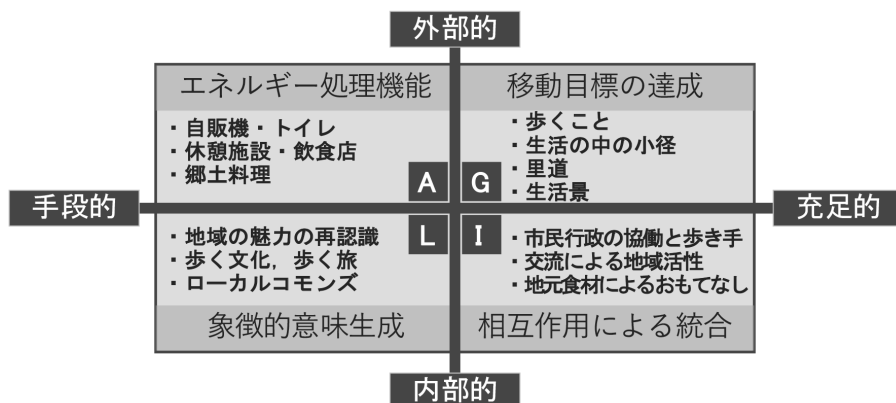


図5 フットパスの特徴

5 オルレ

5.1 オルレとは

先に述べたように、オルレ (olle) という言葉は、韓国の済州島の方言で「通りから家に通じる狭い路地」という意味である。このことから分かるように、オルレは済州島に起源がある。済州オルレ (jeju olle) は、韓国の済州島にある全長約420kmのトレイルルートである。島内を一周する21の正規コース(約350km)と5の追加コース(約73km)からなっている。いずれのコースも15~20km程度、長くとも25km程で、済州島の世界遺産エリア(城山日出峰など)や、オルムと呼ばれる独特の火山地形、美しい海の景色といった、豊かな自然を楽しめる他、漁村集落や市場等を含むコースもあり、地域の文化や地域住民とふれあうことも出来る。これらの点において、オルレはフットパスの考え方と近い点が多い。

渡邊・小畑(2015)によれば、韓国ではトレッキングの国民的な流行に乗って大きなブームとなっており、すでに、済州オルレという名称は、韓国内ではブランドとして定着している。2010年度の済州島の訪問者数は約670万人で、そのうちオルレに参加した人は全体の約30%の約200万人と発表されている。9割は韓国人で1割が外国人である。

大隅(2012)によれば、済州オルレの始まりは、2007年に済州島出身の徐明淑氏(済州オルレ理事長)が、スペインの巡礼の道を歩いたことにヒントを得て、道を整備したことにある。地域ぐるみで旅人をもてなす道づくりをベースに、以下のような済州オルレならではのコンセプトがある。

- ・ できるだけ山、森、里などの古道を使い、アスファルトの道は通らない(避ける)
- ・ 自然だけでなく、市場や農牧場など地域の文化や人ともふれあえる変化に富んだコースとする
- ・ もとの自然・生活風景を乱さない
- ・ 気候に左右されない(雨や風の中を歩くのも魅力とする)
- ・ 誰でも歩ける(ハードな山道、登山道などは設けない)
- ・ 地域住民の手で整備、維持管理できる道をつくる(整備や維持管理にお金をかけない)
- ・ 大手資本による観光ではなく、地域にお金が落ちる観光を実現する

5.2 日本での(九州)オルレの取り組み

九州オルレ(写真4)は、韓国でのオルレのブームを背景に、韓国人観光客を誘致することを目的に始まった。小川(2016)によれば、九州観光推進機構のイニシアチブにより、まず九州7県に最低1コースを設定するところから始まった。2012年に佐賀県武雄市に開設された4つコースを皮切りに、2018年現在21コースがオープンしているが、いずれは25コースをオープンさせる予定となっている。当初は、韓国人観光客の誘致を目的としていたが、徐々に日本人参加者も増加している(兪, 2016)。2012年3月から2015年2月まで3年間に歩いた日本人は58,380人なのに対して、韓国人は倍の104,110人であり、年々増加傾向にある。また、兪(2016)は、九州オルレ武雄コースにおける年間の直接経済効果は9,560万円と算出している。

コース内の要所には「カンセ」と呼ばれる濟州島の馬をモチーフにしたオブジェや朱と青のリボン、木製の矢印やペイントされた矢印などの標識が点在している。これらは、シンプルでありながら、誰にでも分かりやすいデザインになっている（写真4）。カンセの頭が指す方向が進行方向で、青色の矢印は正方向、朱色は逆方向からのルートを示しており、起点と終点が逆になっても、歩きやすいよう工夫が施されている。リボンは青色と朱色を一緒に結んだもので、他の目的で付けられたリボンとの差異化もなされており、分かりやすい。これは、徐明淑氏が元時事週刊誌の編集長という経歴をもち、一流のデザイナーがオルレの道づくりに協力していることも大きな要因とも考えられる（大隅，2012）



写真4-1 カンセ



写真4-2 武雄コースの起点／終点



写真4-3 カンセの描かれた朱と青のリボン



写真4-4 道案内の矢印

写真4 九州オルレの様子（いずれも著者撮影）

以上のことを踏まえ、オルレの特徴を（長田他，2003）の枠組みに合わせて整理すると図6のようになるだろう。

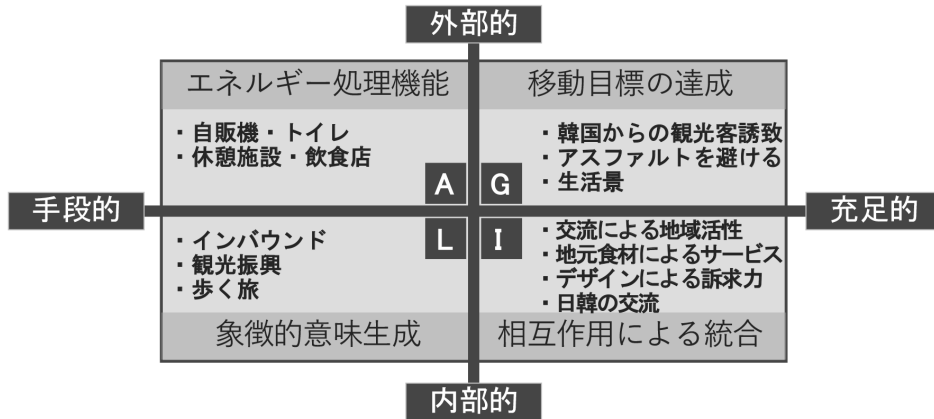


図6 オルレの特徴

6 道と歩くことの可能性

ここまで見てきたように、巡礼，ロングトレイル，フットパス，オルレは，それぞれ歴史的背景やその目的，運用の方法など異なる部分がある。目的や基本となる考えという観点から大きく分けると，信仰や宗教性に基づいてなされている巡礼，自然保護や生態系への関心から発展したロングトレイル，地域性や文化，観光への関心，ローカル・コモンズとしてのフットパスやオルレがあるといえるだろう（図7）。また，街歩きや，山登りも図中に布置した。もちろんこれらは単純に分類されるわけではなく，重なり合う部分もある。

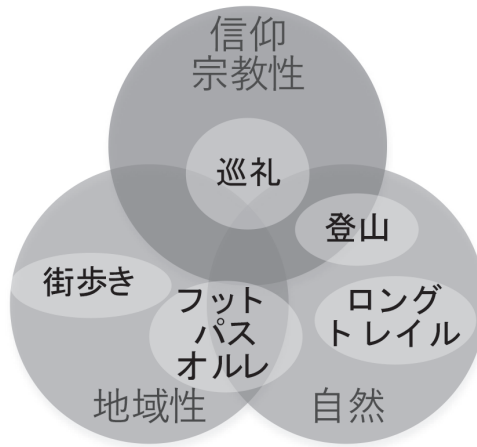


図7 巡礼，ロングトレイル，フットパス，オルレのまとめ

一方でこれらは「歩く旅」「歩く文化の創造」という点で共通している点も多い。

歩く旅や、歩く文化について、どのような効果があるのか、身体的効果は当然のこととして (Berman, Jonides, & Kaplan, 2008; Studenski et al., 2011 など)、今後は次の3点について検討する必要があるだろう。1点目は、歩いている人の心理的機能のメカニズムについてである。2点目は地域振興、地域活性化としての道の活用の可能性とメカニズム、3点目は歩く文化の普及の効果と意味である。これら3点については、稿を改め、それぞれ詳しく論じていくが、その問題意識を簡単に以下に示す。

6.1 歩くことの心理的機能

たとえば福島 (2004a, 2004b) は、歩き遍路には身体・心理・社会すべての側面でヘルスケア効果があることを示唆している。例えば心理的效果としては、(1)感謝とお返し、他者への感謝の念と人のために何かをしたい気持ちになる。(2)自己を見つめ直す：道中、自己と対話する時間が与えられる。(3)感動・自信・達成感：道中の感極まる体験、結願後の自信や自己高揚感が得られる、などである。また、社会的効果としては、(1)普段知り合えないような人との交流。(2)自分らしさの追求、社会的スキルを使って上手に自己主張し、自分のペースを守れるようになるなどである。

また藤原 (2003) は、巡礼心理療法を提起している。巡礼心理療法の鍵となる要因の一つとして「内観による自己分析の深化」を挙げ、それを促進する巡礼行動の環境的条件は、日常から切り離された非日常世界であるとしている。また、巡礼心理療法は、運動・精神療法であり、身体健康と精神健康のバランスをもった相互作用、「規則正しい生活、単調性をもたらす睡眠、快食、歩くという行為、運動、単純歩行、身体を動かすことのメリットが鍵となるだろうとも述べている (藤原, 2003)。

これらの心理的效果は、果たして巡礼に限られることだろうか。ロングトレイルやフットパスなどを歩くこととしての心理的機能について検討する必要がある。

6.2 地域活性化

歴史の道や文化の道、〇〇自然散策路、〇〇遊歩道など、日本各地で「歩く道」が整備されている。しかし、多くの人に利用され継続的に整備されているものもあれば、自然消滅してしまったものも少なくない。運用が上手くいっているロングトレイル、フットパス等を見ると、地域の住民と行政との協働などにより、多様なアクターによって運営され、地域の住民を巻き込みながら緩やかに整備が進んでいく事例が多い。坂本・廣川 (2014) によれば、それぞれの取り組む地域や団体の思惑は多様でありながらも、それらに共通し、最大公約数的な理念が「地域活性化」といえる。日本フットパス協会の設立時には、各地域においてすでに取り組まれているフットパスに共通する概念を模索し、目指すべき方向性と理念を明らかにする必要がある、そこで示されたのが、「フットパス＝地域活性化」という構図であった。

フットパスに限らず、ロングトレイルも、地域住民による管理や、歩く人が訪れることによる交流の活性化、経済的効果も含めた地域活性化は重要な点になるだろう。地域活性化についてはあまり取り上げられてこなかったロングトレイルに関しても、みちのく潮風トレイ

ルでは、その目的の中に地域活性化が含まれている。

最近では、ロングトレイルを通じた地域間連携も盛んに行われている。吉谷地（2016）によれば、済州オルレは九州オルレだけでなく、ブルース・トレイル、コッツウォルズ・ウェッジ、スイスの2トレイル、ビバルマン・トラックと姉妹提携を結んでいる。和歌山県は2015年2月より、スペインのガリシア州と観光交流協定を締結し、熊野古道とサンティアゴ巡礼の道との国際観光共同プロモーション事業を実施している。これらのことを踏まえ、道の整備、地域住民の意識そして地域活性化の関係について、さらなる社会心理学的観点からの検討が必要である。

6.3 歩く文化としての道

地域活性化とも関連するが、観光行動における歩く文化についても、考える必要があるだろう。坂本・廣川（2014）は、これまでのまちづくりでは、「観光」にスポットをあて、地域に存在しないものを人工的につくることが行われ、その結果生じたことは地域社会の均質化であり、「観光」の失敗であると述べている。そのうえで、フットパスを地域経済の活性化という経済的なツールとして認識することが重要で、フットパスを「観光」化したとすれば、途端にフットパスの魅力は失われ、フットパスはフットパスでなくなってしまうとも述べている。

成功しているフットパスの例などを見ると、観光業者、観光スポット周辺の住民だけでなく、つまり点としての資源ではなく、「道」という線、あるいは道の沿線地域（面）に住んでいる住民が主体的に、歩く人とのコミュニケーションをとる機会を持っていることが多い。時に、自分たちのまちを歩く「よそ者」に話かけられ受動的にコミュニケーションが発生することもある。これも歩く文化の一端と言えるだろう。

これらのことは、第1章で述べた、歩かなくなること、あるいは、その結果としての「グルメ・ショッピング、ときどき街歩き」の数日間の「歩かない」観光スポット巡りが、若者の海外旅行の魅力を減退させるという議論とも関連があるように思われる。

フットパスやロングトレイルを観光地という「点」の枠組みで捉えてしまうことは、地域振興のための新しい観光スポットの創出や、単発的イベントのような一過性のものと同じで、長期的には旅の魅力を下げってしまう可能性もあるだろう。このことは、観光行動に関する心理学的観点からの研究知見とも一致する。例えば、林・藤原（2012）は、旅行経験の浅い観光旅行者が、旅行先での単純なポジティブ興奮感情によって旅行満足が高まるのに対して、旅行経験の豊富な者は、ポジティブ興奮感情だけでは、旅行満足度が規定されないという指摘をしている。また、同じ地域を何度か再訪し、旅を深化させていく展開型観光リピーターは、イベントへの参加や受動的に楽しむタイプの観光経験を高く評価せず、リピートに繋がらないという研究（岡本，2018a，2018b）とも整合的である。

これらのことを踏まえれば、安定した地域活性や観光のためには、フットパスやロングトレイルのような歩く文化の醸成が重要になってくると考えられる。歩く文化と観光行動についても社会心理学的観点からのさらなる検討が必要である。

引用文献

- 秋田紀之 (2015). 鉄道廃線跡の利用と地域振興 (特集 人々の「心」をつかむ地域活性化策). 季刊中国総研, 19(1), 31-46.
- Berman, M. G., Jonides, J., & Kaplan, S. (2008). The cognitive benefits of interacting with nature. *Psychological Science*, 19(12), 1207-1212.
- エコ・ネットワーク. (2018). フットパスを歩こう.
<https://city.hokkai.or.jp/~eco/ecofootpath/ecofootpathpage.html> (2018年10月25日)
- Ellis, J. M. (2003). 'For the honor of the town': comparison, competition and civic identity in eighteenth-century England. *Urban History*, 30(3), 325-337.
- Fewster, J. (2004). Walking — social, health and economic benefits, and the law. *Proceedings of the Institution of Civil Engineers-Municipal Engineer*, 157(2), 111-115.
- Frommer, A. (1957). *Europe on 5 dollars a day; a guide to inexpensive travel*.
- 藤原武弘 (2001). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (4): 四国八十八ヶ所遍路の調査的研究. 関西学院大学社会学部紀要, 90, 55-69.
- 藤原武弘 (2003). 自己過程としての巡礼行動の社会心理学的研究 (6) 遍路空間の意味空間と体験過程. 関西学院大学社会学部紀要, 93, 73-91.
- 深田久弥 (1964). 日本百名山 新潮社.
- 深田クラブ (1992). 日本200名山 昭文社.
- 福島明子 (2004a). 大師の懐を歩く: それぞれの遍路物語. 風間書房.
- 福島明子 (2004b). 歩き遍路のヘルスケア効果 健康心理学的観点からみた遍路の魅力. 保健の科学, 46(7), 510-515.
- 後藤春彦 (2007). 景観まちづくり論 学芸出版社
- 原雄一 (2015). クラウド道コモンズによる歩くツーリズム. 日本地理学会発表要旨集, 100125.
- 林幸史・藤原武弘 (2012). 観光地での経験評価が旅行満足に与える影響: 観光動機と旅行経験の観点から. 社会学部紀要, 114, 199-212.
- 平野悠一郎・泉留維 (2012). 近年の日本のフットパス事業をめぐる関係構造. 専修人間科学論集 社会学篇 2 (2), 127-140.
- 廣川祐司 (2014). フットパスの創造とツーリズム 熊本県美里町の地域づくりと生業の可能性. 三保学 (編), エコロジーとコモンズ 環境ガバナンスと地域自立の思想 晃洋書房. (pp.143-164).
- 星野英紀・山中弘・岡本亮輔 (2012). 聖地巡礼ツーリズム. 弘文堂.
- 法務省 (2018). 出入国管理統計表
http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_nyukan.html (2018年10月25日)
- 神田修二 (2007). 長距離自然歩道を考える—いのちと心をつなぐしなやかな国土軸への期待. 国立公園, 717, 14-17.
- 神谷由紀子 (2014). フットパスによるまちづくり—地域の小径を楽しみながら歩く—. 水曜社.
- 加藤潤三・林幸史・前村奈央佳・岡本卓也・藤原武弘 (2015). 多方向的評価法による地域資源の開発—ウチとソトからみた沖縄の魅力—. 関西学院大学社会学部紀要, 120, 103-113.
- 加藤則芳 (1999). ジョン・ミューア・トレイルを行く—バックパッキング340キロ. 平凡社.
- 環境省 (2018). 長距離自然歩道の概要について

- <https://www.env.go.jp/press/files/jp/8994.pdf> (2018年10月25日)
- 環境省自然環境局 (2012). 東北太平洋岸自然歩道基本計画.
- 小林紀晴 (1995). *Asian Japanese アジアン・ジャパニーズ1*. 情報センター出版局.
- 小林紀晴 (1996). *Asian Japanese アジアン・ジャパニーズ2*. 情報センター出版局.
- 小泉武栄 (2001). 登山の誕生 人はなぜ山に登るようになったのか. 中公新書.
- 泉留維 (2010). 里道が担う共的領域 地域資源としてのフットパスの可能性. 三保学, 管豊, ・井上真 (編), *ローカル・コモنزの可能性—自治と環境の新たな関係ミネルヴァ書房*. (pp.38-61).
- 泉留維 (2013). 地域資源としてのフットパス. *森林環境*, 2013, 94-104.
- 泉留維・廣川祐司 (2018). 日本のフットパスにおけるウォーカーの志向について. *専修経済学論集*, 52(3), 21-33.
- 猪股泰広, 周宇放, 佐野浩彬, 紀鑫淼, ・呉羽正昭 (2017). 「信越トレイル」におけるトレッキング・ツーリズムの特性: 日本の農山村におけるトレッキング・ツーリズムの展望. *地域研究年報*, (39), 91-112.
- McCloy, A. (2016). *The pennine way-the path, the people, the journey*. Cicerone Press Limited.
- Moor, R. (2018). *On trails, an exploration*. Simon and Schuster. (岩崎晋也 (訳) (2018).
トレイルズ「道」と歩くことの哲学. エイアンドエフ.)
- 室谷正裕 (1998). 新時代の国内観光: 魅力度評価の試み. *運輸政策研究機構*.
- 中村達 (2013). ロングトレイル時代への序章. *国立公園*, 717, 10-13.
- 中村達 (2017). 広がるロングトレイルと歩く旅. *国立公園*, 757, 10-13.
- 野島秀勝 (1981). 道のうた・道思想. *IS*, 14, 8-11.
- 日本フットパス協会 (2018). フットパスとは. <http://www.japan-footpath.jp/aboutfootpath.html> (2018年10月25日)
- 日本ロングトレイル協会 (2018). ロングトレイルとは. <http://longtrail.jp/syui.html> (2018年10月25日)
- 日本交通公社 (2018). 観光資源台帳.
<https://www.jtb.or.jp/research/theme/resource/tourism-resource-list> (2018年10月25日)
- 日経 TRENDY (2012). 日経 TRENDY (トレンディ) 2012年12月号 日経 BP 社
- 長田政一・坂田正顕・関光雄 (2003). 現代の四国遍路—道の社会学の視点から. 学文社.
- NPO 法人信越トレイルクラブ (2012). インタビューブック信越トレイルと加藤則芳 オフィスエム.
- 小川巖 (2007). フットパスは地域を変える —北海道の取り組みから. 浅川昭一郎. *北のランドスケープ—保全と創造 環境コミュニケーションズ* (pp.164-172).
- 小川巖 (2016). 九州で急展開しているオルレ (フットパス) に学ぶ. *開発こうほう*, 634, 14-15.
- 大隅一志 (2012). “自然と人に癒される道”〜「済州オルレ」を歩いて. *日本交通公社 観光研究コラム*, 178.
- 岡本卓也・石盛真徳・加藤潤三 (2010). 面接調査法としての写真投影法. *関西学院大学先端社会研究所紀要*, 2, 59-69.
- 岡本卓也 (2013). 景観とコミュニティ. 加藤潤三・石盛真徳・岡本卓也 (編), *コミュニティの社会心理学* ナカニシヤ出版. (pp.101-126).
- 岡本卓也・藤原武弘 (2015). 登山行動に関する社会心理学的研究—登山動機の構造とその変遷—. *関西学院大学社会学部紀要*, 120, 167-180.
- 岡本卓也 (2018a). 観光旅行者のリピーター行動に関する研究 (1). *日本社会心理学会第59回大会*.

- 岡本卓也 (2018b). 観光旅行者のリピート行動に関する研究 (2). 日本心理学会第82回大会.
- 小田実 (1961). 何でも見てやろう 河出書房新社
- 坂本裕基・廣川祐司 (2014). 日本におけるフットパスの起源とその社会的意義. 基盤教育センター紀要, 20, 107-128.
- 沢木耕太郎 (1986a). 深夜特急 第一便 黄金宮殿 新潮社
- 沢木耕太郎 (1986b). 深夜特急 第二便 ペルシャの風 新潮社
- 沢木耕太郎 (1992). 深夜特急 第三便 飛光よ, 飛光よ 新潮社
- しまたけひと (2012). アルキヘンロズカン 上・下 双葉社
- しまたけひと (2016). みちのくにみちつくる 前編・後編 双葉社
- Studenski, S., Perera, S., Patel, K., Rosano, C., Faulkner, K., Inzitari, M., Guralnik, J. (2011). Gait speed and survival in older adults. *Journal of the American Medical Association*, 305(1), 50-58.
- 寺村淳 (2015). 地域づくりにおけるフットパスの有効性とコーディネーターの役割に関する研究. 農村計画学会誌, 34, 219-224.
- Urry, J. (2002). *The tourist gaze*. (Ed. 2). SAGE.
- 渡邊公章・小畑博正 (2015). 観光まちづくりにおける新しい公共の役割: 武雄市の九州オルレを事例として. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, (47), 159-167.
- 山口さやか・山口誠 (2009). 世界の歩き方の歩き方. 新潮社.
- 山口誠 (2010). ニッポンの海外旅行 若者と観光メディアの50年史 筑摩書房
- 山中弘 (2012). 概説 作られる聖地・甦る聖地 星野英紀・山中弘・岡本亮輔 (編) 聖地巡礼 ツーリズム 弘文堂
- 兪明善 (2016). 済州オルレと九州オルレ武雄コースに参加した韓国人旅行者の消費動向と経済効果. 観光学論集, 11, 77-86.
- 吉谷地裕 (2016). ロングトレイル・コラム03 ~ロングトレイル連携に学ぶ実態ある連携. 日本交通公社 観光研究コラム, 286.
- Zimmermann, E.W. & Hunker, H.L. (1964) *Erich W. Zimmermann's introduction to world resources*. Harper & Row (石光亨 (訳) (1985). 資源サイエンス——人間・自然・文化の複合 三嶺書房)

Social psychological study of the way and walking. (1)

-What is the long trails, footpaths and olle-

ABSTRACT

In this paper, we aim to delineate the possibility of the way as resource in tourism, then we summarize basic information on various ways used for tourism. First, we reviewed the historical transition on walking in tourism behavior and then summarized the long trails, footpaths and olle in Japan, which has become popular in recent years. From these findings, we discussed the possibility of walking with the road as resources.

Key Words: way, walking, footpath, long trail, tourism resources

(2018年10月31日受理, 12月4日掲載承認)